

浮世絵とものがたり

～俵藤太とムカデ退治

うたがわくによし ごじゅうさんつい くさつ
歌川国芳画「五十三対 草津」

(草津市蔵・中神コレクション)

東海道五十三対のシリーズは、歌川派の広重・三代豊国・国芳の合作になるもので、それぞれの宿場の伝説や史話を下部に描き、上部には絵詞(えことば)を入れ解説を加えています。絵詞の部分の囲みは、扇型や団扇(うちわ)、海老、角丸長方形、雪輪の六種類があります。草津は海老の囲みで詞書が記され、絵師は歌川国芳、版元は団扇問屋でもあった海老林(海老屋林之助)です。

さて、五十三対のうち草津では、俵藤太(たわらのとうた)と百足(むかで)退治伝説を取り上げています。『太平記』にもみえ、室町時代の「御伽草子(おとぎぞうし)」のひとつ『俵藤太物語』にある伝説で、俵藤太とは平安時代の武将・藤原秀郷(ひでさと)のことです。

伝説の内容は、延喜八年(908)、秀郷が瀬田橋を渡ろうとしたとき、龍が湖面から女性の姿になって現れ、野洲郡にある三上山を七巻半もする大きな百足退治を依頼します。秀郷はこれを首尾よく射止め、そのお礼として湖底にある龍宮に案内され饗宴を受けました。そして、「俵藤太」の名の由来ともなった財宝の尽きることのない俵や、太刀、鎧、釣鐘などを授かりました、というもの。このうち、釣鐘は自らが信仰する三井寺に寄進。その後は俵や巻絹は尽きることはありませんでしたが、ある人が俵の底をたたいたところ、小さな蛇が現れ、それまで尽きることはなくなったといわれています。

秀郷が龍宮で饗応を受ける光景は、『東海道名所図会』の挿絵にも「秀郷龍宮城に到る」と紹介されています。歌川国芳の描く「東海道五十三対



草津」は、白波が寄せる湖面から現れる長髪の龍女が主役。陸から俵藤太が弓を手に、龍女を眺める光景が、そして背後には、伝説の舞台となった瀬田橋のシルエットが描かれ、上部の海老で囲まれた絵詞には、伝説の概要が記されています。

「東海道五十三対」は、街道筋の風景を描いたシリーズとは異なり、伝説や史話を取り上げた企画で相当インパクトがあったものと推察でき、歌川広重・二代歌川豊国の「双筆五十三次」など、物語性をもつ浮世絵なども人気を博したと考えられます。

近江の街道筋には、土山の坂上田村麻呂(さかのうえのたむらまろ)伝説や三井寺弁慶の引きずり鐘伝説など、ほかにも多くの伝説や史話が残り、浮世絵や名所図会に取り上げられています。

(令和5年8月・草津宿街道交流館 岡田 裕美)